

景/観/文/化

NPO法人 景観デザイン支援機構 Town Design Aid, Japan <http://www.tda-j.or.jp>

2022-05-01



目次

- P1
■巻頭
ラッピングバスは、走行する路線全体の景観に配慮することが必要
／武山 良三
- P2～3
■TDA NEWS 1
動く景観の現在と未来
／杉山 朗子・川西 康之
- P4～5
■TDA NEWS 2
大学研究室紹介
『地域産業が生み出す風景と居場所』
～千葉大学・安森研の活動～
／安森 亮雄・附田 悠杜・村山 香菜子
- P6
■「生物多様性」を通してヨーロッパの都市と生活が見えてくる その3
／並河 みき
- P7～P8
■景観故事
No.2 ニグロ・ニッポン型
／曾根 幸一
- P8
■身近な景観を作る
第4回 時代を語る照明
／近田 玲子
- ホワイトボード

ラッピングバスは、走行する路線全体の景観に配慮することが必要

富山県南砺市井波は、木彫刻のまちとして知られている。落ち着いた通りを歩くと木の香りが漂い、あちらこちらから「コン、コン、コン…」と職人たちの振るうノミ音が聞こえてくる。身体の芯から癒やされるようなまちだ。

ある時、デザイン協会のメンバーを案内して町を散策していると、強烈なデザインのラッピングバスが通りかかった（写真）。黄色地に赤い金魚と思われる図柄を大きくあしらったデザインは、落ち着いた町並みにはあまりに不釣り合いで、参加者からは一斉にブーイングが起こった。一瞬の出来事だったが、そこにはラッピングバスや屋外広告物が抱える課題が凝縮されていると、思わず考え込んでしまった。

痛感したのは、デザイン条件を特定することの重要性だ。デザインをつくり手の好みではなく、使い手にとって良いデザインとするためには、誰がどこでどのように使うのかといった設計条件の検討が欠かせない。しかし、ラッピングバスは移動するものなので背景の設定が難しい。一つの路線が、駅前の賑やかな商業地域から緑豊かな自然地域、伝統的な町並みが残る歴史地域などを通して移動することもあるからだ。井波の事例は、まさにそのような事情が表出した。

ラッピングバスは表示面積が大きいことから景観に配慮することは必須であり、いくつかの都市ではガイドライン等を設けてその適正化に努めている。それらの多くに「都市景観へ配慮すること」といった文言が見られるが、これでは漠然としてしまっている。ぜひ、「バスが走行する路線全体の景観に配慮すること」といった記載として貰いたいものだ。

景観的な配慮をしながらも、広告としての機能も果たしていかなければならないラッピングバスのデザインには、高度なデザイン力が求められる。しかし、ラッピングバスをはじめ屋外広告物のデザインは、施工業者が仕事を確保するためにサービスで提供する場合が多い。当然コストはかけられないので、スポンサーから提供された素材をそのまま拡大したようなデザインもある。ボディの継ぎ目や空気孔など車両の特性に配慮し、原寸確認をすることは当然として、背景となる景観を確かめる丁寧なデザインが必要だが、短納期・低コストという現実の中で質は二の次になっている。公共の場で広告を行うということには社会的責任を伴う。しっかりと費用をかけて良いものを作らなければならないし、良いものでなければ宣伝効果も上げられない。材料代は認めても、デザイン費は払わないという悪しき社会通念を変えることが肝要だ。

富山大学理事・副学長／サインデザイン専門誌「signs」編集長 武山 良三

動く景観の現在と未来

近年、東京都へ乗り入れている観光バスやトラックなどの車両に過剰な広告が掲載されていることが散見されるようになりました。景観として違和感を覚えるこうした状況は、地方産業の生き残りをかけたブランド戦略に伴うデザインの乱立が一因とされています。また、東京都が決めている広告規制の条例と地方都市が決めた景観規制の条例の間で基準が異なることも要因となっています。

そこで今回は、屋外広告物の審査に関わってきた方や、電車やバス、トラムといったモビリティ、言い換えるのであれば、「動く景観」をデザインしてきた皆様にお話を聞き、景観デザインの視点から「動く景観」を考えます。

1. 東京都における「動く景観」の位置付け

TDA正会員 杉山 朗子

私は、これまで、東京都の広告審議会において、屋外広告の色彩展開やサイズ・文字数や大きさ・イラストや画像の表現性と景観の関係について審議してきました。この広告審議会には、「動く景観」に関する審査基準を作られた方もいらっしゃる、車体広告の基準を多く学びました。その後東京屋外広告協会に関わることになったのですが、今や協会は、東京都から「動く景観」も含めた屋外広告物の審査を唯一任される民間団体として現在でも研究を続けています。景観デザインの中で「動く景観」の広告についてしっかり考えようとしてからは、いろいろな基準を作るようになりました。ただ、この組織が審査する「動く景観」は、民間のバスや広告宣伝車、タクシーの審査だけなので、都電や都バスは審査していません。そうした「縦割りの評価」となっているので、都の審査したデザインをたまに見かけると、あの色彩は良くないのではないのかと思うこともあります。

ちなみに、こうした「動く景観」を審査する際には、東京屋外広告協会は、基本

方針として、①交通安全に配慮したデザインとすること、②公共空間に相応しいデザインとすること、③街区の景観に配慮したデザインとすること、④街区の賑わいに資する洗練されたデザインとすること、⑤年齢、性別に係らず人々に不快感を与えないデザインとすること、⑥社会的弱者に配慮したデザイン及び広告方法とすることを掲げています。こうしたことをもとにガイドラインなども設置しています。

ちなみに、東京以外の地域における「動く景観」は、威圧的だったり、特殊な表現のデザインのものも多いように思います。また、派手な色ものも多くありますね。人によっては、こうしたデザインに不快さを感じたりするようです。本当に「公共をデザインする」活動は難しいなと感じます。



図1：東京屋外広告協会が発行する車体ラッピング広告に関する規制をまとめた報告書

2. 「動く景観」を通して目指すべきもの

(株)イチバンセン一級建築士事務所/ネクストステーションズ代表 川西 康之

私共は、地方社会での仕事を数多く行なっております。

「動く景観」を代表するものと、新潟県上越市を走る雪月花という観光列車があります。ちなみに、観光列車というのは、乗客にとってはランチと風景を楽しむものになっているものなのですが、同時に地域の魅力を発信する役割も担っています。そのため、新潟の景観と対をなす映える色が採用されました。こうした地域の魅力とは、事業主がえちごトキめき鉄道、つまり、第三セクターですので、行政の意向を翻訳したものとなっています。JR 西日本の意向のもと行なった WEST EXPRESS 銀

河は、色彩を自然と対比的に使うだけでなく調和させる手法をとりましたが、基本的に地域の魅力を発信するためのデザインという考え方は同じです。

また、民間バスですと、「道のりホールディングス」が事業主となっている宇都宮市の関東自動車バスをデザインしています。これは宇都宮市のライトレールや JR 宇都宮線と兄弟デザインとなるように類似したデザインにしながらも、色彩の違いによってその乗り物ごとの機能の棲み分けを行なっています。こうした民間交通機関であってもその経営難からどの会社も少なからず税金が投入されている関係から、先に挙げた雪月花同様に行政の意向がデザインに反映されているわけです。

ちなみに、私は、フランス国有鉄道交通拠点整備研究所というところに文化庁の派遣制度を使い入所していました。TGV 高速鉄道などのデザインに関わる組織です。フランスはもともと集合住宅の個人の部屋に設けられたカーテンの色を変えただけでも指導の入国なので、こうした公共施設や公共のインフラの色を変えることには非常に厳しい国でした。そのため、そうした場所で景観を作ることの意義を多く学ぶことができました。



写真1：地域の色を意識してデザインされた「関東自動車バス」
photo by Yasuyuki KAWANISHI

3. 対談：日本における「動く景観」と公共性を問う

ゲスト：杉山 朗子×川西 康之

編集委員：オム・ジョン×金子 祐介

●日本の「動く景観」の問題点

金子 お二方のお話を聞き、ここからは対談に移ろうと思います。まず、川西さんからお話に上がったように、景観に対する意識の高い民度の持ち主であるフランスの国民と日本人の景観に対する意識の間には大きな隔たりがあるかと思っています。ただ、フランスではないので、私たちは日本人特有の文化や景観に対する接し方を踏まえた上で、「動く景観」もデザインしていかない



写真2：風景の中で映えるようにデザインされた車両「雪月花」

photo by Yasuyuki KAWANISHI

といけないわけですが、日本の「動く景観」に対して何かお考えはありますか？

川西 Copenhagen Zooに行くSnake Busというものをご存知でしょうか？ とてもウィットに富んでいます。景観に馴染んでいるかというところとも言えませんが、日本ではこうした意識の高い広告ものはない。どちらかというと日本の都市部を走っている「動く景観」は、景観デザイン以前の問題が課題として大きいような気がしています。欧米圏の国々からすれば公共空間で違法媒体を扱っていると受け取られかねない不適切な広告を載せたラッピングカーも走っています。そうした状況は、モラルが破綻しているとも言えます。

ジョン 韓国の「動く景観」とくにバスは、機能が重視されているので視認性があるように路線ごとに色分けされています。もちろん、広告を載せたラッピングバスも多くありますが、日本のようなモラルのないものはありません。ただ、バスの側面窓を潰して全面的に広告を載せたバスなどが走っています。乗り物としての機能がなくなっているように思います。なので、こうしたデザインに対して規制を作っていくことは必要かもしれません。

杉山 東京都では、一応、こうしたモラルのない内容を掲載している「動く景観」に対しては、内容とモラルの点から規制をして認可は下ろせないとしています。「公序良俗に反しないこと。基本的人権を損なわないこと。消費者保護の観点から適切な内容とすること。」など。また、虚偽または誇大な表示。根拠の無い効果、効能の表示。責任所在が明確でない表示に対しても

同様です。車体広告も車体面積に対してのパーセンテージがまっています。色彩も規制されている色があります。信号の色を見損なったりすることを避けさせるために赤や黄色の原色は規制されています。ただ、他県ナンバーには、こうした規制がかけられないというのが現状です。

●動く景観から考える「公共の利益」とは？

金子 そう考えると、東京23区のような大都市圏では、「動く景観」の規制はあつてないようなものなののでしょうか？

川西 先ほどご紹介した私どもがデザインした雪月花は、真っ赤な色をしています。杉山さんの説明下さった東京都の条例では、問題作として例としてあげられてしまうかもしれません。ただし、我々としては銀朱色という鳥居の色と近似した色を用い、新潟の自然景観に馴染む車体の色彩を考えました。ただ、この車両も長野や富山に乗り入れることがあります。その時には「新潟から朱い列車が来た！」ことをアピールして新潟に帰ってもらいたいと思っています。ただ、そうしたささやかな願いとは裏腹に、他県の都市部では景観を乱す目立った広告と捉えられてしまうこともあり得ますね。

金子 他にも、こうした「動く景観」がもたらす課題はあります。例えば、現在、各地域社会の特産品や魅力などを載せたラッピングバスが、東京都内を走っています。しかも、行政がその広報活動を先導しているということが問題なのではないのかと考えています。ただ、景観的には問題なのですが、彼ら地域社会も地域の生き残りをか



図2：韓国の車体ラッピングに関する規制

けて広告を載せているので、無碍にも出来ないというのが悩ましいところですね。こうしたことを考えると、景観を考える以前に「公共の利益」というものをまずは考えていかないとけないのかなと思います。

ジョン 国家レベルで議論をし、ガイドラインを策定していくことが必要ですね。先ほど、公共にそぐわないと思われるデザインという話が上がりましたが、これは特定の人にとっては利益にはなるが、そうでない人にとっては気持ち悪いわけですね。この個人的な利益とか気持ち悪いという指標がどういうことで起こっているのかということも明確にして議論したほうがいいと思います。

川西 確かに、「公共の利益」というものがとても重要なキーワードになりますね。フランスでは、セーヌ川の景観を目指して観光客が来るから、景観を守らないといけないという意識があります。ただ、日本とくに東京の場合は、歌舞伎町や秋葉原の景観がいかに東京を象徴するものだから、そこに馴染む「動く景観」が求められてきたのかもしれない。

金子 日本の多くの都市の場合、景観を意識したまちづくりというより、個々の建築の集合体として、景観ができあがってしまったのかもしれない。

杉山 確かに、日本の住宅街は、個人の財産だから景観からの観点で規制がないとされてきたわけです。ただ、パリのそれを見ればわかるように、個々人の財産である住宅においても「公共の利益」を考え、景観的な配慮をしているわけですね。「動く景観」はその背景の中でポイントとなるように作られているという、景観全体を考える思考がしっかりしているんですね。

金子 日本も、この景観が良い/悪いという評価を誰かが下すのではなく、まずは「公共の利益」という全体をどう構築するのか或いはより良い景観が「公共の利益」となり得るのかあたりの議論をすべきなのかもしれませんね。

大学研究室紹介

『地域産業が生み出す風景と居場所』
～千葉大学・安森研の活動～

研究室紹介

千葉大学大学院 教授 安森 亮雄

千葉大学安森研究室は、2020年4月からスタートして現在3年目であり、その前身の宇都宮大学安森研究室（2009年～2020年）の11年間で発展させながら活動している。発足当初から「建築と都市の関係性」が中心的な関心であり、研究活動（リサーチ）による分析・体系化と、設計活動（デザイン）による実現・社会化という両側面を、相互にフィードバックさせながら活動している。

こうした関心のもと、主に3つのテーマを展開している。1つ目は、「都市の空地」であり、安森の大学院生時代から継続するテーマとして、建築と周囲をつなぐ“最小の都市空間”としての媒介空間を捉えるものである。2つ目は、「地域の素材と産業」で、宇都宮大学での大谷石（おおやいし）の調査から始まり、素材や職人の生業に遡ることで、「産業の連関」として建築と都市の形成を捉えようとしている。3つ目は、「大学キャンパス」である。キャンパスは、多くの建物や、学生・教員・地域住民を含めた人々が活動する“都市の縮図”とも言える空間であり、空地や素材というテーマとも関連しながら、校舎改修やキャンパス計画の実践も伴い展開している。

本稿では、特に「地域の素材と産業」についての展開を2つ紹介する。

まず、大谷石に始まる「石のまち」のフィールドワークである（図1）。元々、都内の東工大に在籍していたが、北関東の宇都宮大に赴任し、地域で産出される大谷石という素材に出会った。フランク・ロイド・ライト設計の旧帝国ホテル（1923年）に使われたことでも知られるこの石材は、市内では多くの石蔵や石塀に使われ、都市の風景の一部になるとともに、大谷町

には多くの石切場があり、現在でも採掘が続いている。こうした石蔵や町並みについて、市街地から農村部まで500棟以上を実地調査し、その活動は、地域のNPOや、建築士会、石材業者、市役所とも連携していった。同時に、宇都宮大のキャンパスでは、大谷石を活用した校舎改修や休憩所を設計した^{注1)}。

10年ほど調査を続けるうちに、徐々に日本各地で、大谷石と同様の凝灰岩が産出し石の建物がみられる都市を訪問して、交流するようになった。現在、日本の「石のまち」という視野で、石材というマテリアルがつなぐ産業・建築・町並みの連関と、まちづくりまでを視野に活動が続いている。千葉県にも房総半島（富津市金谷）に房州石という石があり、まちづくりの将来を一緒に考え始めている。これらの関東の石材は、主に東京・横浜の近代化に用いられたもので、産地と消費地の関係も含めた、地域素材についての探究である。

次に、地域産業における「ものづくりの空間」に関するフィールドワークである。石材産業もそのひとつであるが、地方都市や周辺市街地では、手工業による産業が息づいており、染物工場（宇都宮、浜松、大阪堺、東京江戸川区等）、酒蔵（栃木県）、製陶所（益子）などを対象に、ものづくりの空間の調査してきた。こうした工場の空間には、特有の魅力と活気があり、作業に適した空間の設けから、生産の様子が表出する都市の風景までが魅力的である。宇都宮では、宮染めのリサーチを市美術館と共同で行い、市民参加のコンペで新しい柄のパターンを開発し、その展覧会を宇

都宮大のキャンパスで開催して、会場デザインを行った^{注2)}。

千葉大学では、2021年4月に墨田サテライトキャンパスが開設され、そこを拠点として、デザイン・リサーチ・インスティテュート（dri）という分野横断の活動が始まっている。墨田区は、多くの町工場がある「ものづくりのまち」であり、研究室院生が履修する大学院スタジオで「町工場の世代と再生」をテーマにフィールドワークを始めている^{注3)}（図2）。区内には多くの業種があり、地域ごとに特徴があるため、昨年度は、北部（向島）の金属業、今年度は南部（本所）の繊維業や印刷業、さらに隅田川や荒川沿いの皮革業など、順次進めていく予定である。今年度からは、空き工場活用の共同研究もスタートした。



図2：墨田の町工場のリサーチ ©morinakayasuki

これらのいずれのテーマにおいても、研究で分析や体系化するには、観察する建築（例えば、石蔵や町工場）の「型」＝タイプロジーを見出す手法をとっている。個別の事例や形を包含する「型」を見出すことで、その形の背景や条件を掘り下げ、さらに、次の創造へとつなげる媒介になる。20世紀的な空間構成の型に留まらず、素材の具体性や、時間軸、人々のアクティビ

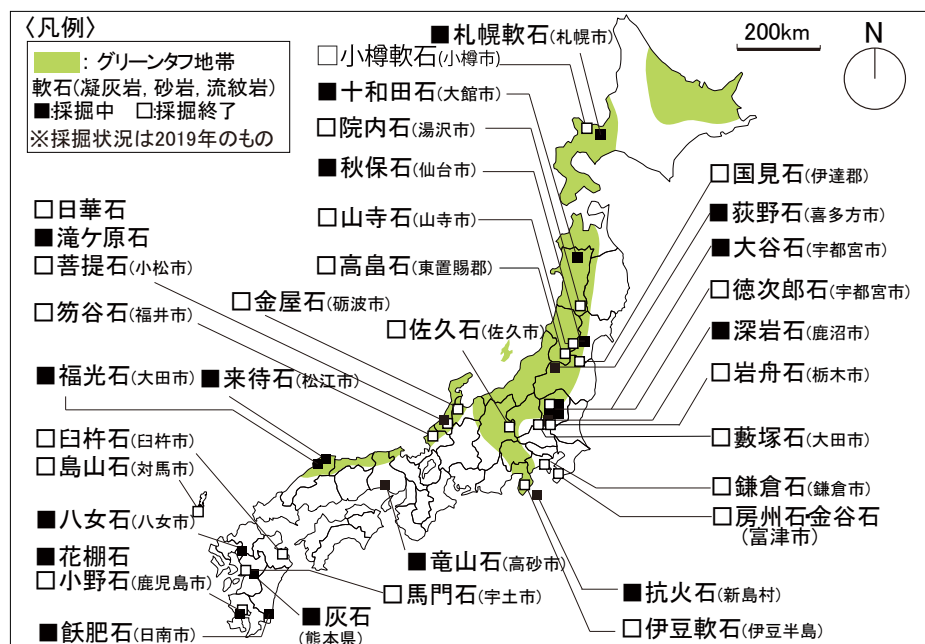


図1：石のまち（代表的な軟石の産地）

ディなどを含む、21世紀の「ポスト・タイポロジー」をあぶり出そうとしている。また、こうした先に、設計による実現・社会化があり、都市スケールの風景と、身体スケールの居場所の間に建築を位置づけることで、両者が同時に存在する新しい「風景と居場所」を創造したいと考えている。

注1) 震災がれき大谷石の再利用による休憩所
<https://www.g-mark.org/award/describe/40388>
注2) 地域産業とデザイン〜宮の注染を拓く〜
<https://www.g-mark.org/award/describe/44548>
注3) 千葉大学大学院建築デザインスタジオB
担当：安森亮雄・森中康彰（非常勤講師）

1. 石のまちのフィールドワーク

千葉大学大学院博士前期課程 附田 悠杜

私は、高校時代に地元の深さ 200m を超える採石場を見学したことがあった。その壮観な風景と人間の生業の歴史に感銘を受け、印象的な経験として心に残っていた。大学での卒業設計では鉱山を敷地とし産業遺構のあり方や活用について考えを深め、自分の興味も石のまちの研究に移った。

日本遺産大谷の設計競技

昨年、修士1年4名と安森先生で「日本遺産大谷の持続可能な地域づくり」をテーマとした設計競技（主催 日本建築学会関東支部）に参加し、最優秀賞を受賞した^{注4)}（図3）。大谷地区のフィールドワークを行い、採石産業の痕跡や未活用の場所の魅力を集め、大谷地区の更なる可能性を考えた。私たちは提案にあたり、大谷石の運搬に用いられた旧採石軌道と駅の跡、積出作業所、そして大谷地区の農地に点在するポンプ小屋に着目した。現在、大谷地区では主に西側が観光地となり、交通渋滞や歩行者の歩きにくさが問題となっている。それに対して、東側に位置する旧軌道を新たな交通ルートとして回遊動線を形成することで、面的に広がるエリアができると考えた。旧軌道に電気トロッキと自転車、歩行者の道を整備し、旧駅の再生（新たな交通拠点の整備）、積出作業所の再生（モノからヒトのリノベーション）、ポンプ小屋の活用（道の点景の整備）という3つのプロジェ



図3：日本遺産大谷の設計競技

クトを提案した。過去と未来、点在する場所をつなぐ「懐かしい未来の道」によって、新たな人の流れと場所性をつくりだす構想である。

東北の石のまちとこれから

修士論文として東北の「石のまち」の研究を開始し、昨年は、山形県の高畠石、福島県の国見石、宮城県の秋保石を調査した。国見町の旧小坂村産業組合石蔵の中で見た木組と国見石の壁の空間は、木の柔らかな風合いと石の荒々しくもどこか繊細な姿が重なりあって、惹きつけられた。この東北訪問は大雪に見舞われたが、農閑期の冬に石工は石を採っていたという話に、厳しい作業環境を肌で感じる思いだった。

これらの活動を通して、地域素材である石は、単なる建築資材ではなく、古代の地層から近代の産業を経て現代に至る歴史を含み、各地の風土に根差した地域性を持つ魅力的なものであると考えた。最近では老朽化や耐震性により石の建築が減少している現状があるので、石の建築や街並みの価値を伝え、今後のまちづくりに活かすためにもこの研究を深めていきたい。

注4) 日本建築学会関東支部 提案競技 第22回
<http://kanto.aj.or.jp/proposalcompetition>

2. ものづくりのまち・墨田のフィールドワーク

千葉大学大学院博士前期課程 村山 香菜子

私の祖母は、村で唯一の商店を自宅に併設する形で営んでいる。私は祖母の暮らし方やお店が担う役割の多義性に魅力を感じ、職住近接の建築や街に興味を持った。修士1年でもものづくりのまち・墨田におけるスタジオで職住共存の都市に視野を広げ、現在、町工場をテーマとした修士論文に取り組んでいる。

墨田の町工場の大学院スタジオ

「町工場の世代と再生—墨田の地域産業における職住共存の行方—」というテーマ



図4：町工場のカルテ

のもと、昔ながらの街並みが残る墨田区北部エリアをスタジオメンバーで手分けして、金属工場のフィールドワークを行った。観察を続ける中で、町工場には、建物内での共存（住むことと町工場を営むこと）と、地域との共存（騒音問題や敷地の狭さへの配慮）に対する工夫が、外観に多く表れていることがわかった。町工場のアイソメ図にそれらの工夫を書き込みながら、工場の情報をまとめた町工場カルテを作成し（図4）、町工場のタイポロジーを見出していった。さらに、各エリアの特徴をもとに町工場の建て替えや改修を提案した。

私は、京島と東向島エリアを担当した。長屋などの戦前の建物がそのまま残り、下町らしい風景が続いている。1階を工場、2階を住居とする家型をした小さな町工場が多く、住宅の中に工場を構えた第1世代（1950年代まで）のものが半分を占めていた。他の地域よりも敷地が小さいため、職と住を両立させるための小さな設いを続けている。モデル提案では、小さな敷地を使って、リサーチで得られた設いの工夫を用いながら、ファブラボを中心とした町工場が存続するための拠点を設計した。

墨田リサーチの展開

スタジオの成果をブックレットにまとめるとともに、秋に開催された「すみだ向島 EXPO2021」^{注5)}で旧町工場のスペースを使って展示し、地域の方々にスタジオの成果を共有した。この展示を通して私は、普段何気なく街に佇んでいる町工場のひとつひとつの共通点から抽出したタイポロジーが、都市や建築について議論し合う1つのきっかけになることを実感した。

さらに、墨田サテライトキャンパスに隣接する公園に新設される公衆トイレのコンペ（主催 UDC すみだ、共催 墨田区）に、私と研究室同期の2名で挑戦し、スタジオを通して捉えた墨田の小さな設いの特徴を踏まえたトイレの提案を行った^{注6)}。私たちは、最優秀賞を頂き、実施設計に参加しており、令和6年度に竣工予定である。

建物のタイポロジーや設いは街との接点であり、墨田という街並みを形作っている。今後の研究も含めて、町工場の特徴を踏まえて、変化する墨田という街でどんな風景を大切にしていきたいのか、議論を喚起できれば良いと考えている。

注5) すみだ向島EXPO2021 <https://sumidaexpo.com/>

注6) 大学のある街のトイレ 最終審査結果
https://udcsumida.jp/2021/09/23/come_result/

「生物多様性」を通してヨーロッパの都市と生活が見えてくる その3

登録ランドスケープアーキテクト(JLAU,AILA)/TDA正会員 並河 みき

現在（4月下旬）、東ヨーロッパでは信じがたい戦争が続いている。圧倒的な暴力によりかけがえのない人命が失われ、都市が粉碎され、その周辺の自然も被害を受けている。独裁者の傲慢な陣取り合戦がさらにエスカレートすれば、それは自滅へとつながるだろう。

一方、工業化により現代都市を築いた私たちもその過程で気づかぬうちに、自然環境に対する傲慢さを身につけ（あるいはその浄化能力を過信して）、自然を過剰に脅かしてきたのかもしれない。その結果として、地球上の自然がバランスを崩しはじめていると感じる人は多いのではないだろうか。

さて、今回は都市での生活が都市のみでなく、遠く離れた場所にまで与える影響と、わたしたち個人が行動することの重要性に焦点をあてる。

EU生物多様性ブックレットにおいて、このトピックに関連するパネルは3つあり、それらは「世界の海に「ゴミの島」をつくらない」、「生物多様性のホットスポットを見つけよう」、そして「携帯電話に動物の鳴き声をダウンロードしてみよう」だ。「世界の海に「ゴミの島」をつくらない」では、海に流れ込むプラスチックごみの問題に焦点が当てられている。この「ゴミの島」は、潮の流れによって寄せ集

められたゴミでできた島々で、この中に「太平洋ゴミベルト」と呼ばれる350万km²に及ぶ島がある。第二次世界大戦後にプラスチックが大量に普及したことを考えると、わずかに50年を超える期間でこうした島々ができてしまったことになる。そして今やプラスチックは私たちの日常にあふれている。最近は制限されているが買い物で使うプラスチック袋、テイクアウトの飲料カップやストロー、弁当のプラスチック容器、ペットボトルなど。多くの日本人は高度に文化的な生活態度を持ちゴミ分別もきちんとする。しかし、日本は太平洋に位置するため、きちんと分別されたゴミも誤って風に飛ばされれば簡単に海に到達する。「きちんと分別している」から大丈夫なのではなく、「もともと使わない、買わない」へ転換していくことが重要だ。

他の2枚のパネルでは、実際に希少動物が集中して生存するエリア（ホットスポット）を調べてみることや、希少動物の鳴き声を携帯電話の着信音として登録し、これが鳴るのをきっかけに、生物多様性について周囲の人と話し合うことが提案されている。最近、日常におけるこうした会話が私たちの行動を変革するかもしれない、と気づかされる機会があったのでご紹介する。それはメルボルン大学で行われた知人の博士論文*最終審査会の録画を見たときで、

彼はグリーンアーバンライフへの一般世帯の意識と行動について研究を進め、メルボルンに住む1676世帯にアンケートを実施し、768世帯から回答を得た。その中で明らかになったことは、回答者のおよそ80%が大いに気候変動を信じ、90%がその影響を心配し、70%がそのために情報収集を週または月に複数回しているが、実際この課題について周囲の人と「頻繁に」又は「大いに頻繁に」話す世帯はおよそ40%にとどまった。さらにこのリサーチでは、グリーンアーバンライフへの実践態度によって各世帯を6つの貢献タイプに分類し、貢献度の高いグループが住むエリアを特定した結果、自然の多い北東エリアと並んで、ヒップスター的な（カッコいい）郊外で、グリーンな行動を実践するサブカルチャーが育っていることがわかった。論文の最後には、「カフェやワインバーやディナーパーティーでカーボンニュートラルは実現しない」というオーストラリアのモリソン首相による2021年の発言が引用されているが、実際にはこれに反して世帯レベルの行動変革は、日常生活における会話をきっかけに育まれるサブカルチャーによる貢献が見逃せないことが示唆された。

*博士論文出典 Lakshmanan, Madhu. (2022). Green Urbanism as a way of life in the Anthropocene

※TDAホームページで当ブックレット翻訳パネル公開に向け、現在、掲載サイトを準備中です。

携帯電話に動物の鳴き声をダウンロードしてみよう

Week 27

アメリカの生物多様性センターは、一般市民に生物多様性が今日、直面している危機に、気づいてもらうためのユニークな方法を提案しています。それは希少動物や絶滅の危機に瀕している、または近づいている、動物の鳴き声を無料でダウンロードして、携帯電話の着信音に使用できるサービスです。

ハヤブサの鳴き声や、ジャイアントパンダの声、シロイルカの歌声など…どの着信音を選んでも、それを聞いた人が驚きその鳴き声の主である、危機に瀕した動物について話す機会が持てるでしょう。

これら着信音のダウンロードと、それぞれの動物たちについての情報は、次のウェブサイトからダウンロードできます。
www.rareearthtones.org



© 2011 European Union
Japanese translation © 2021 Miki Minoda

世界の海に「ゴミの島」をつくらない

Week 33

人類が捨てたゴミでできた島々は、世界中の海で潮の流れによって寄せ集められています。それは「太平洋ゴミベルト」だけでも、ほぼ350万平方キロメートルに及びます。

これらの島々は主にプラスチックでできています。プラスチックは分解されるのに500年から1000年かかり（その過程で多くの有害物質を排出し）、プラスチックのヒモやかけらをエサと間違えて飲み込んだ魚、カメ、そして海洋哺乳類を窒息させてしまいます。

このことについて、私たちにできることは何でしょう。プラスチック（袋、ボトルなど）の使用を減らし、屋外にゴミを捨てないようにして（たとえどれだけ海から遠くても）、多くの人はそんなものがある存在とも気づいていない、ゴミの島々について周囲の人と話し合しましょう。



© 2011 European Union
Japanese translation © 2021 Miki Minoda

EU生物多様性ブックレットの公式HP: <https://op.europa.eu/en/publication-detail/-/publication/6c7d9481-f359-4312-ab95-d87b68a23f02>

わが国の自然は、放つておくと草木が生茂る生態である。これを「照葉樹林文化」として提唱したのは、京都大学の民俗学者：中尾佐助氏であった。宮崎駿の「もののけ姫」がこれを下敷きにつくられているといえバイメージしやすいだろう。民俗学とは、ある種の探検で、地球上のあらゆる人達の生活態や遺跡などを観て歩く学問だから衣・食・住の様態を様々なくくり方で分析する。樹木や焼畑、稲作だけでなく、食でいえばお餅ちや納豆、食器や桶、漆塗りや編み物、さらにこれが竹の編み物になるとだんだん住居に近づいて家屋の特徴が挙げられてくる。

住居の構成については佐々木高明氏の論考などがあって、照葉樹林帯の家は木組が使われ、床を宙吊りに持っているから、玄関があることなどが指摘されるが、世界の多くの住居は床から土塁（版築）や煉瓦を立ち上げて、てっぺんに屋根をかける形式が多いことなどが考察されている。

先の中尾氏の研究のなかで、注目すべき提唱に「世界の住居様式の四大類型」がある。住居は家屋と庭が一体になって成立するのが原則であるという観点から、世界中の民家の配置形態を分類していることだ。四大類型には「カスバ・ホートン型」の垂流としてモンゴル・フラニー型がヨーロッパの北にある一方「ニグロ・ニッポン型」

の南にピグミー・パプア型があるが、配置形態をテーマとするなら二つに集約してもよさそうだ。

「カスバ・ホートン型」は一言でいえば内庭型である。カスバはアフリカ北海岸モロッコなどにみられる密住集落でホートンとは、中国の院子（ユワンツ）をもつ四合院（シーホーユアン）で、高い外塼をもつて互いに接し密集して立ち並んでいる特有の街路が胡同（ホートン）である。その圏域は北アフリカからインドの東端アッサムあたりを經由して中国の雲南を中心に湖南省に至り江南から上海を含むゾーンだとされている。

この型は、遺跡として残るギリシャ時代のメガロン、中庭のペリスティルとか、アトリウムと呼ばれる家、さらにはローマ時代のインストラという集合住宅を考えてもいい。明らかに周辺を壁で閉じ、中庭をもつ形態である。欧州の市街地形成の型は地中海沿岸のものが広がっていったといえそうだ。つまり彼らは個人の敷地でも街区でも、自らの領域の縁に壁をつくって内側に向かう構成をとっているのだ。

メガロンとかアトリウムという住居はせいぜい1階か2階だが、ローマのインストラは街区そのものを立ち上げた中庭型の庶民の集合住宅で4階建位まであったらしい。中世のフランスにみられるバスティドと呼ばれる集落、近世そして近代までその構えは変わっていない。

自らの領域を縁に寄せて家を構える形式は「ペリメーター型」とも呼ばれる。彼ら

は街区の縁に建物を寄せてゼロロットつまり道路際に余白など造らずに壁をつくり、中庭側に家屋をつくるというプロセスをたどっている。庭の真ん中に家を構え、それをずるずると広げて庭を愛でる場面を造ろうという我が国の伝統建築の配置とは真逆なのである。

パリやベルリンに残る古い街区などには、道路沿いを埋め尽くしたのち裏屋をつなげて十字型や不定型な棟を接続し、僅かな穴だけが穿たれている街区も沢山ある。パリなどでは中庭に光りを確保するために「街区協定」などもある。また道路側から光をとるような凹凸の工夫が出てくるのは世紀末だなどという研究もある。ニューヨークのマンハッタンの先端でわずかな採光を左右からとるダンベル型のテナメントハウスと呼ぶ住棟がJ.Eウエアなどによってモデルにされたのもその一つである。

19世紀の末まで市街地の建築は6階までとされた。歩行で登っていたのだから今では想像もつかない高さである。オースマンタイプのパリ改造で指示されたブルジョワ型の沿道建築は高さ6階＋屋根裏部屋である。エレベーターはエリシャ・オチスがニューヨーク万国博（1853）に落下防止装置をつけたものを発表したのが、その普及は20世紀になってからである。

一方、「ニグロ・ニッポン型」は垣根などのある庭に囲まれた家屋で、比較的融和な自然環境に囲まれ、労働・生活の領域を家屋の外周に持ち、意識を外庭へとひろげる遠心的な構成をもつ型である。たしかに

（次頁へ続く）



図1：中尾佐助氏による「世界の住居様式の四大類型」

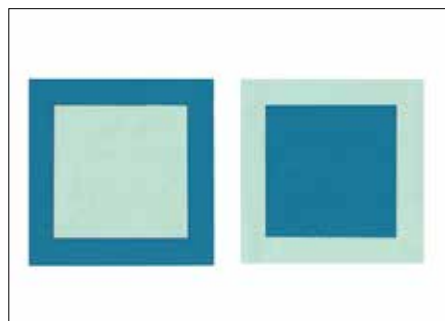


図2：「カスバ・ホートン形」と「ニグロ・ニッポン型」



図3：街区構成における空間システムの概念（筆者作成）

わが国の建築の構えは、古代の寝殿造りや中世の武家造り、さらに庭師の活動が盛んであった江戸の屋敷、近代の庶民住宅に至るまでの住居の構え、さらには社寺・仏閣の類までパビリオン型つまり「周囲に庭というマージンを持つ構え」である。これと関連して町屋は街区の縁を構成する建築であるから形態が違っている。大局的には街区型の建築だと言えるが、これとて庇が必要だから左右に「庇合の空間」が必要なのである。この構成はRC造が多くなった今日でも同じで、銀座通りといえども正面のタイルを両脇に回し込むような隙間を持って造られている。共同壁を持つ例などほと

んどない。こうした形態が中央アフリカの住居の配置とも共通しているというのだ。世界中の郊外住宅を考えるなら「ニグロ・ニッポン型」も多いのではという意見もあるだろうが、狭隘な住宅地の両側に生垣ならともかく、ブロックやフェンスが二重になって敷地際まで顔を出すという現実には「電柱がなかったら」と同じように異様な景観とも言えるのではあるまいか？

もう随分前の2008年に建築学会に「近代の空間システム・日本の空間システム」（都市と建築の21世：省察と展望）なる企画があった。私は、「中心と周縁」という配置の対比をできるだけ理解してもらお

うと、正方形の図形を示して（フレネルの正方形＝面積が相互に半分になる正方形）をパネル化して持ち込んで、彼等の空間概念を対比的にしめしてみた。つまり、「カスバ・ホートン形」と「ニグロ・ニッポン型」である。会場の人たちは興味深く聞く人もいたが、肝心の登壇者とは議論が散逸して、このことをどれだけ理解していたのかわからない。反響の少なかったことに驚いた記憶がある。しかし、このテーマは私たち建築家にとっては、自然観に共通する歴史があると思っているし、またそのことが柳田國男も指摘するように現下の市街地にも大きな影を落としていると思うのだ。

身近な景観をつくる

照明デザイナー／TDA副代表理事 近田 玲子

第4回：時代を語る照明

筆者の暮らす東京・巣鴨には、「おばあちゃんの原宿」で有名な地藏通り商店街がある。4のつく日に毎月3回開かれる縁日は、コロナ以前は多くの高齢者で賑わっていたが、コロナが始まった2020年ごろから高齢者に代わって中年・若年層の客が増えてきた。こうした客層の変化に伴って商店街もこの2年間で数店が店内を改装し、数店が新しい店と入れ替わり、数軒が古い建物を壊して新しいビルに建て替えている。3タイプの店舗の照明から、地藏通り商店街のこれからを考えてみた。

安さを予感させる煌々とした白い光

地藏通りの「昭和イメージ」を代表する1952年（昭和27）創業の洋品店である。安価な品揃えが有名なこの店目当てに巣鴨を訪れる高齢者は今も多い。店内は商品棚やダンボール箱の中の商品を見やすいよう、思いきり明るくされている。視力の弱った高齢者への配慮でもあろう。筆者が実測した店内の照度は1,700ルクスから2,000ルクス。この商店街のコンビニ2店内の実測値750~1,000ルクスと比べても飛び抜けて明るい。天井の剥き出しの110W

蛍光灯の煌々とした白い光は、物販倉庫や市場のような商品の安さを連想させ、客は財布の中身を心配せずに買い物を楽しむことができる。

いつもの時間を提供する明暗差の少ない光

どこの街にもある、アジフライ、エビフライが評判の和食の定食屋である。ネット検索による紹介記事と食べログ評価3.5を見て訪れる人が増えたのか、土日や昼時には行列ができる。店内は温かみのある電球色のダウンライトの光でノスタルジックに明るい。テーブル面と壁のメニューを照らすスポットライトは店内を明るくするために後から加えられたと思われる。全体の明るさに強弱の少ない50年前の昭和の穏やかな照明だ。

プチ高級感が味わえる間接光

去年新しく開店したパン屋である。「銀座〇〇〇〇」と書かれた大きな暖簾が目目を惹く。黒く塗られた外観、木格子、黒瓦屋根、電球色のLEDの光と、新築でありながらレトロな雰囲気漂わす。通りからは間接照明で照らされている棚が見える。購入するのは中年・若年層の客で、棚に並べられている2種類の食パンは夕方までには売り切れると聞く。どの町でも見かける

プチ高級感・レトロ間接照明の店が増えることによって、巣鴨地藏通り商店街から高齢者の足が遠ざからないか。時代を先取りした「高齢者が集まる街」というイメージが徐々に薄れてしまうのではないかと余計な心配をしている。



左：昭和27 創業の洋品店



右：和食の定食屋

下：銀座のパン屋



ホワイトボード

コロナ禍ではありますが、4月末現在、感染者の減少が見え始め、まちの人出も以前に戻りつつある様に見えます。TDAも、毎年開催していたまち歩きや韓国の有志との交流会も中止し、オンラインでのセミナーや交流会の開催を余儀なくされました。

オンラインは地方や海外からの参加が出来て良い面もありますが、直に会うことの良さも実感させられます。今年度は、海外中継の試みや、まち歩きも少しずつ再開していく予定です。詳細が決まりましたら、皆様にご案内していきたいと考えています。